予算

港湾、文教、福祉、辺地の四大施策に肉づけ

—ことしの予算規模は—

一般会計七億九千三百六万四千円、特別会計（三会計）二億五百六十五万三千円で、あわせて九億九千八百七十一万七千円です。

これは、前年度の当初予算に比らべ八千三十一万五千円増ということになる。

なお、このほかに、水道病院の二企業会計二億三千四百万円の予算規模になっている。

—これらの予算を、どのように施策と結びつけて肉づけしたのか。

まず、全般的に「健全な市政は財政から」という点から、あくまでも健全財政をまもるということである。

その基盤に立った市勢の振興ということで、昭和四十年度を起点とした市勢の一大飛躍をはかるという基本計画にあわせ、財政の調整ということに重点をおいている。

このような考え方から、ことしは、とくに、港湾施設の整備、文教施策の充実市民福祉の向上、へん地振興の積極的対策の四つを重点施策にとりあげ、実際の予算的肉づけをした。

—入ってくる財源を使うということもよいが、財源を作ることが、今後の市政の基本になるのだが…。

もつともな話です。現状では所得の自然増より財源の培養があり得ない。

少ない人口で、所得が増えれば豊かになるから、基本としてはこういう形が望ましいだろう。

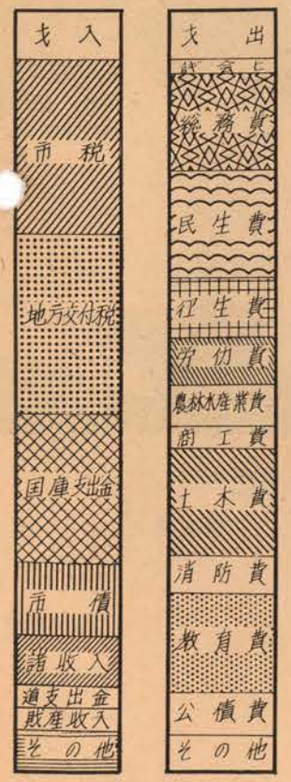
しかし、現実にはそうはうまく行かない。

そこで、課税の公平合理化による納税意欲の向上と納税組合など、協力機関の育成、活動を促進して、固有財源を確保して行きたい

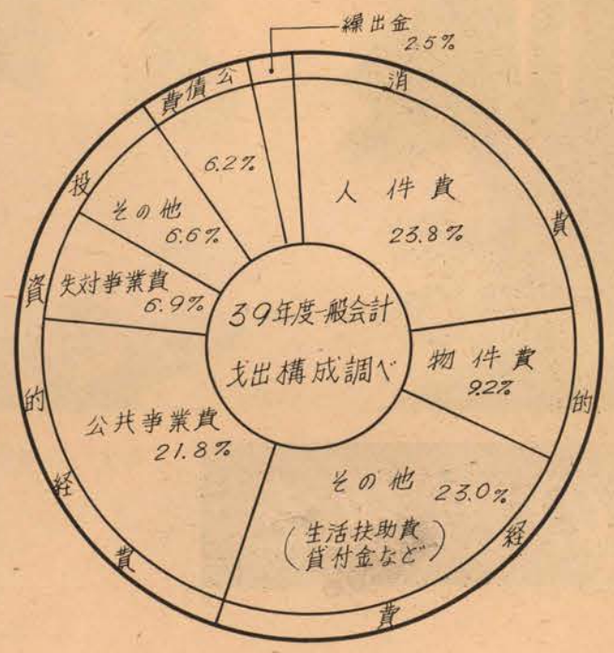
さらに、国の投資を持ってきて開発すれば、そこに産業もたち、人も増える。

これによって財源の培養をしようと考えている。

結局、これは、産業の振興ということにつながることになるわけです。

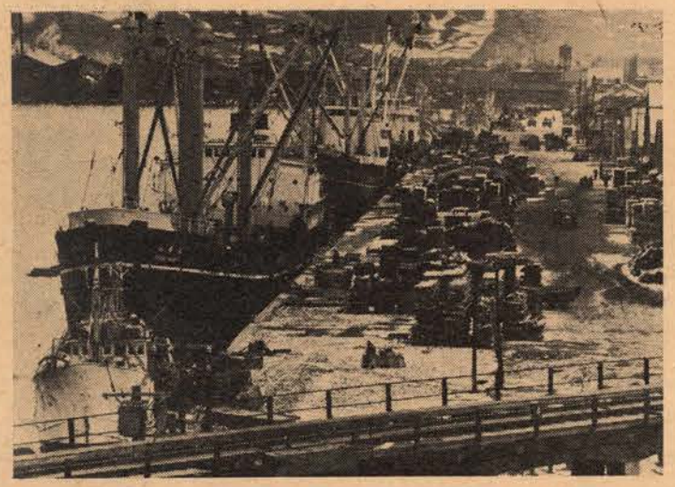


39年度一般会計予算



港湾

雑貨倉庫建設に家屋移転 北岸船だまりも本年完成



—留萌港の整備拡充に、大きな力を入れているがどのような意味があるのか

留萌市の歴史は港にはじまり いまも留萌港の発展なくして 留萌市の発展はない。

つまり、最近の経済は、留萌市のみでなく 道北経済との関連を持つて発展している。

その中で占める留萌港の役割りは大きく、これが伸長すると道北の経済 さらには留萌市の経済が発展、成長していくことになる。

留萌市の飛躍的発展はまず経済力を強くすることにあり、そのためにも、留萌港を急速に整備拡充しなければならないわけです。

ただ おことわりしておかなければならないことはいかに留萌港の整備に力を入れるとはいえ 他の行政までも犠牲にして力を入れるということではなく、他の行政もこれと歩調をあわせて進めて行くということには変わりありません。

そうしなければ 港はりつぱなものができたが それに付随する生活環境などが遅れているというアンバランスなことでは、市政の円滑な発展ができないからです。

—このように力を入れている留萌港の現状はどうなのでしょう。

港勢の伸びは、港湾費の増額投資などにより、ここ二、三年非常にのびています。

つまり、港の出入貨物の取扱量は、毎年平均二〇%もの伸びをみせ 道内にある小樽、函館、室蘭など重要港湾の中で、伸びりつは一番上位にあります。

さらに、南岸壁雑貨三バースの完成、留萌港開発株式会社の創設、大豆輸入港の指定、留萌本線の完全客貨車分離による輸送力の増強など、一連の解決により留萌港と、道北経済の中心である旭川市を結ぶ中核都市との経済提携の基礎が一段と強化されるようになりました。

—それでは、ことしはどのような事業をしようとしてるのか。

ことしは、国費一般事業二億一千万円、災害復旧事業一億三千万円の合計三億四千万円の予算化が決定しさらに補助、起債など多額の収入が見込まれています

そこで、いままで留萌港の致命的な欠陥だつた外港の波を静かにして内港的な性格を持たせるため 南防波堤を三米高くして、船の出入りや、錨船を容易にします。

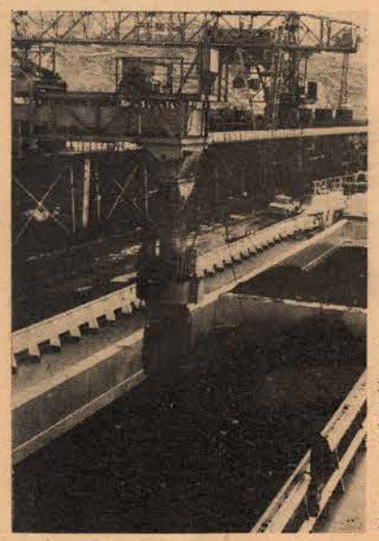
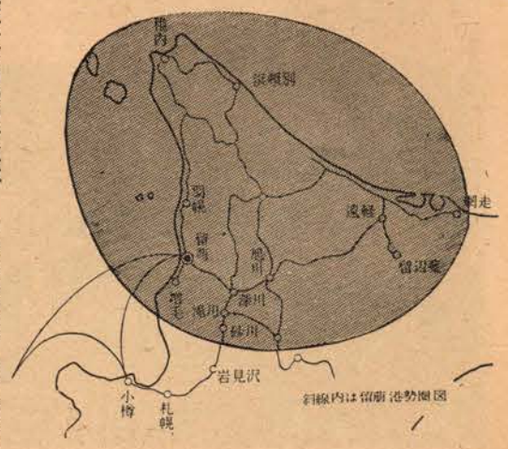
また、北岸船だまりを本年中に完成し、木材施設として相当の利用、効果が期待されます。

さらに、多年の念願だつた雑貨岸壁の完成に伴う倉庫の建設も、中央に認められましたので、ことしは、付近の家屋移転などを行います。

これが完成しますと、留萌港の将来を約束するとまでいわれた雑貨の出入りが大巾に増え、商港としての性格を持つてくることになります。

このほか、南岸壁の道路舗装、航路のどろさらい、北岸東突堤基部の整備などが行われます。

なお、あやまりのない港湾計画をたてるために、中央の権威者を招き、基本的な計画を早急にたてると同時に、できるだけ早く留萌港の整備拡充が実現するよう今後も国や関係機関に要請して行きます。



留萌港の経済圏はこんなに広い